



編集発行/日本大道芸・大道芸の会 光田 憲雄

(daidogeikib.biglobe.ne.jp) http:// daidougei.seesaa.net

富士講の今

富士講は江戸期台初期に長谷川東覚角行によつて始められた富士山を信仰する講社である。角行という名の由来は、富士山の人穴で、四寸五分角の角材の上に爪先立ちで千日修行を果たしたことに由来するというのが、まともじゃ考えられない。日常の活動の中でも一番大事なのは六月一日現在(は)七月一日の山開きの日に富士へ登頂することである。登頂に当たつては両国橋の東側下流寄りにあつた垢離場で身を清めてから向かつた。左図は『東都歳事記』が載せる富士講の人たちが富士山を目指す場面である。



身祿の遺跡を訪ねることが最大の目的であつた。

一方、当時の富士山は女人禁制であつた為、ミニチュアの富士山(富士塚)が築かれるようになった。こちらは女性も勿論、年寄りや子供まで誰でも登頂出来た。

高さは四五メートル乃至十五メートルだが、見晴らしの良い高台などに築かれてあつたため、実際より高く見晴らしも良かった。

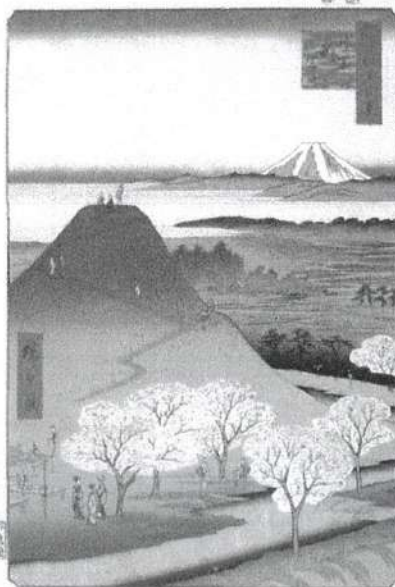
著名なものでは北方探検の近藤重蔵が目黒の別邸に坂へ移動を命ぜられた。そとというと娯楽であつたのに、築いた「新富士」と、彼がのたため、留守を隣家の農民モデルにした「元不二富士」半之助へ任せることにした。

元不二富士

『八丈実記』を書くことになり、関係ないのでこま。

新富士元富士がどちらか品川富士は現在まで続く富士講では、講員がそれなりの格好をして富士登山の再現(講員は交代で富士山へ登頂する)。

先頭は案内役の猿



続いて行者姿の講員



新富士 は、共に広重の『名所江戸百景』に載せられたほど著名であつた。数年後、大坂での粗相が中でも新富士は、山の麓たたり小普請組へ落とされを玉川上水分流が流れ、遠た重蔵が、返還を求めたが、くに駿河の富士山も見渡せ奉行から小普請へ落とされる絶景であつた。忽ち江戸た重蔵の足下を見て返さな名所となり、日夜茶店が富三が、一家皆殺しにした並ぶほど多くの人々が押し富三が、一家皆殺しにしたかけるようになった。

最後は信者や見物の人たちいあめ八丈島へ流罪となりも一緒に登拝する